

講評 画家・絵本作家 たなかしん

ノンフィクションは、想像では書けません。取材して、調べて、自分の言葉で書く、これは大人でも非常に難しいことではないのかと思っています。「こども海の文学賞」は第1回なので、小中学生でどれくらい応募があるのかなと心配していましたが、350通以上が寄せられ、作品自体も本当に素晴らしいものがたくさんありました。

小学生は、自分の言葉で書かれている作品が多かった印象です。最優秀賞を受賞した三和君の「明石うらぎよきょうのたんけん」は、「1年生でこれだけ書けるのか」と度肝を抜かれました。漁協で行われていることが一目瞭然。音の表現を工夫して臨場感を出し、細かいところまで丁寧に描かれているのに加え、質問して返ってきた答えに対してどう思ったかもしっかり書かれています。三和君に弟子入りさせてもらいたいくらいです。

優秀賞も、好きな作品ばかりです。向井さんの「海の色」は、宇宙に行ったガガーリンが「地球は青かった」と言ったのと同じくらいの衝撃がありました。いろんな感覚を持った人がいることを気付かせてくれます。中林さんの「貝が大そうどう」は、笑いながら読みました。「チミチミ」「チョミン」などの擬音が独特で、独創性があり、楽しく書いていることが伝わってきました。高橋君の「魚を3枚におろした」は、読みながらお腹がすいて、よだれが出そうでした。そう感じさせてくれるのは、いい文章だからだと思います。

鯛のことを細かく取材して感じたことをいっぱい書いて、章立てで編集作業までやって完成させた中村君。気になったことをお父さんお母さんにインタビューして、魚が好きだから人にもすすめたいと面白いアイデアをたくさん出した張田さん。お父さんとの思い出を春夏秋冬に分けて、季節ごとに兵庫のおいしい魚を紹介してくれた境さん。真珠からエイの話題まで、ユーモアたっぷりにつづった谷吉さん。入賞した作品も、それぞれ特長があって、楽しませてもらいました。

中学生は、もっと深掘りしてほしいなという印象が残りました。優秀賞に選ばれた岸田君の「アカウミガメの故郷、明石」は、全体的にはよく書けていると思います。だからこそ、疑問点を探して、気になることを調べて、立体的に見て、もっといっぱい書いてほしい。そうしたら、面白かったり、感心したり、知らないことを学ばせてくれたりする読み物になるのではないかと感じま

した。きつともっといい作品が書けると、大いに期待しています。

自分の内面を見せてくれた毛利君の文章は魅力的でしたが、エッセイっぽい書き方ですので、見たり聞いたりしたことを解釈して、読み手に伝えることを意識したら、ノンフィクションとして素晴らしい作品になるのではないかと思います。ゆいさんも峯岸君も、自分の体験を生き生きと楽しく書いていますので、もう一步踏み込んで深掘りしてみてください。

応募作品を通して、ノンフィクションをもっと読んでみたいなという気持ちになりました。知らないことはまだまだ世の中にたくさんあります。言葉にしていって、誰かがその文章を読むことで、興味の輪が広がっていき、世界が変わるきっかけになる可能性があります。皆さんの力作から、すぐく意味のある文学賞がここに誕生したんだと確信しています。個性あふれる作品をどんどん寄せてください。この賞を一緒に育んでいきましよう。